

植物保護に思う

平田敏彦

植物保護とは一体何か、ということを考える時、私は二つのことを思い出して腹立たしくなります。一つは、以前白馬岳に登った時の事です。大雪渓を過ぎて足場の悪いガレ場を登っていた時、少々疲れたので手頃な岩を見つけて腰を下していました。大雪渓をアリのように行列をつくりながら登ってくる登山者を見下しながら、気分良く汗をぬぐっていると、突然少し上の方からハンドマイクで此方に向って大声でがなり立てている人がいます。廻りの人の目が一せいに私の方に向けられたのですが、私は一体何を言われているのかわからずキョロキョロあたりを見廻しておりました。

横に座っていた人が私に、「どうやら、あなたが草を踏んづけていることを言ってるようですよ」と教えてくれました。慌てて立上ってみると確かに植物の葉が岩の上にかぶさっていて、その一部が私の尻の下に敷かれていたことがわかりました。うわさには聞いていましたが、白馬岳のお花畑の管理の厳しさに改めて驚かされた半面、何もあそこまでしなくても、せっかくのいい気分を壊されたのもあって正直腹が立ちました。結局、そこまでしなくては白馬岳の自然が守れなくなっているという現実があるからとは思いましたが、何か釈然としない気持ちが残りました。



ゴゼンタチバナ
(野田 光蔵：新潟県植物事典)

もう一つは、知人から聞いた話ですが、学生の植物学実習のために、国立公園内で標本採取の許可を申請したところ、結局不許可となり、仕方なく別のフィールドに変更せざるを得なくなったことがあったそうです。しかし、その翌年、大手のデベロッパーが全く同じ場所でスキー場を開発するために行う大規模な伐採は許可されたというのです。この二つが同じ環境庁によって管理されている国立公園内で行われているのだから呆れて物が言えません。一体、日本の環境行政はどのようなポリシーのもとに行われているのだろうか、植物保護の前途は多難である。

私自身も仕事柄否応なく同様な自己矛盾を引き起こすような場面に立たされる時があり、対応に苦慮することがあります。知らず知らずのうちに同様な体質になってしまわないよう、普遍性のあるポリシーを築き上げて行かなければならないと痛感しています。

(ひらた としひこ：(株)グリーンシグマ)



(堀 正一：尾瀬の湿原をさぐる)